『函館大学論究』第48輯（2017年３月）別刷

「素晴らしい新世界」小論

山　田　康　夫

「素晴らしい新世界」小論

山　田　康　夫

序

ユートピアは存在するのだろうか？存在可能なのだろうか？これまで数多くの人々がその可能性を追求してきた。ある時は思想的に、ある時は現実の世界で政治（ロシア革命などの壮大な社会実験）として。そしてまたある時には小説（フィクションとして）の形式で。しかしそれらの試みは第三者の立場から見れば例外なく失敗しており、ユートピアはいつの間にかディストピアになってしまう。なぜそのような状況に陥るのか？答えはいたって簡単。人間はいわゆる自由意志を持ち、かつ一人一人すべて別の人間だからである。100人いれば100通りのユートピアが存在することになり必然的にあらゆる人間にとってのユートピアなど存在しないことになってしまう。つまりシステムとしてのユートピアは必然的に崩壊してしまう。ユートピアとはあくまで桃源郷的な夢の世界であり、現実世界には有り得ない。

ではユートピアは不可能なものであり、人間には永遠に手が届かないものなのだろうか？実はそうではない。発想を転換すれば何とかなることもまた自明のことだろう。どんな社会システムを作ってもユートピアの建設が不可能なら、つまり建物がそこに住む人間にとってどうやっても不満が残るものなら、その不満をなくすためには人間が変わればよい。容れ物を変えるのではなく中身を変えればよい。しかも単に不満を言わないようにするのではなく不満そのものを感じないようにし、むしろ喜びを感じるようにすればよい

のだ。そうすればユートピアは可能になるだろう。ただし問題点は、人間が人間であることを否定することになるため、いったい誰のためのユートピアかが分からなくなるということ。これさえ目をつむれば可能だろう。そしてそれをやったのが「素晴らしい新世界」（以下*Brave New World*の頭文字をとってBNWとする）なのである。

この作品は一見ユートピア的ディストピアを描いた物語であるが、16年後に「1984」というディストピア物の金字塔とでも言えるような作品を書いたオーウェルはこの作品が気に入らなかったらしくその評価は中々手厳しい。オーウェルはBNWを評して次のように述べている。

Mr Aldous Huxley's *Brave New World* was a good caricature of the hedonistic Utopia, the kind of thing that seemed possible and even imminent before Hitler appeared, but it had no relation to the actual future. (注1)

オーウェルはまたザミャーチンの「われら」に関する書評の中で、比較としてBNWを取り上げ、そもそもBNWで描かれる世界の存在理由に疑問を呈している。

The aim is not economic exploitation, but the desire to bully and dominate does not seem to be a motive either. There is no power hunger, no sadism, no hardness of any kind. Those at the top have no strong motive for staying at the top, and though everyone is happy in a vacuous way, life has become so pointless that it is difficult to believe that such a society could endure. (注2)

オーウェルは自分自身共産主義にどっぷりつかり、実際にスペイン内乱で

フランコ軍とも戦い、自分が信じたもの（共産主義）の持ついかがわしさとでもいうべきものも敏感に感じ取っていた。それと同時にその妖しげな魅力とでもいうべきものも感じ取っていた。そんな彼から見るとBNWは如何にも「ぬるい」物語であり、戦前の作品であることを差し引いても我慢ならないものだったのだろう。彼の指摘は確かに正鵠を射ているところもある。特にその「生きる意味もないし、この世界は存続できないのでは」という指摘は鋭くその本質を見抜いているといえよう。

一方ハクスリーの方はオーウェルの批判などどこ吹く風といった具合で彼の「1984」について*Brave New World Revisited*の中で次のように語っている。

In the context of 1948, *1984* seemed dreadfully convincing. But tyrants, after all, are mortal and circumstances change. Recent developments in Russia and recent advances in science and technology have robbed Orwell's book of some of its gruesome verisimilitude. … assuming for the moment that the Great Powers can somehow refrain from destroying us, we can say that it now looks as though the odds were more in favor of something like *Brave New World* than of something like *1984*.

In the light of what we have recently learned about animal behavior in general, and human behavior in particular, it has become clear that control through the punishment of undesirable behavior is less effective, in the long run, than control through the reinforcement of desirable behavior by rewards, and that government through terror works on the whole less well than government through the non-violent manipulation of the environment and of the thoughts and feelings of individual men, women and children. (238-9)

最終的に「1984」の中に見られる圧政なるものは長続きしない、むしろ

BNWの世界のような「ゆるさ」が人を支配するのに役立つのだ、ということを科学を援用しながら主張している。彼は社会主義や共産主義の暴力性を見逃しているのでは？と思わせるところもあるが、しかしながらBNWを読み込んでみるとその世界の恐ろしさ、不気味さ、救いのなさがその姿を現す。ハクスリーが意識しているかどうかわからないが、結果としてBNWは驚くほど現代的、未来的（2017年現在）問題意識を内包しているのだ。今回の論文においては「1984」などの作品も補助線として横目に見ながらBNWのその悪夢度とでもいうべきものを明らかにしていきたい。そのためにはまずBNWの主人公たちに注目しながらその分析を通してBNWの真の姿を探りたい。それによっておそらくBNWで描かれる世界の本当の姿が明らかになるはずである。わざわざここで「おそらく」と入れたのは、そもそも彼らは登場人物ではあるがどの一人をとっても主人公足りえない人物のように見えるからである。それもあってこの物語はその恐ろしい喜劇性とでもいうもの（よく考えれば悲劇性かもしれない）を我々に示すのだ。主要な登場人物の一人は確かに死を迎えるのであり、死という点だけを見れば確かに悲劇かもしれない。一般的に喜劇の中では主要な登場人物は非業の死を遂げることはないからだ。しかし、やはり同時に喜劇でもありうるのかもしれない。笑った後で恐ろしくなるような喜劇という意味で。

１．馴染めない人々

BNWの世界は徹底的な管理社会である。子供はすべて工場（CENTRAL LONDON HATCHERY AND CONDITIONING CENTRE 中央ロンドン孵化・条件付けセンター）で生産され、しかも完全な身分社会を作り上げるためにアルファ・ベータ・ガンマ・デルタ・エプシロンの５段階の人間を作り上げている。薬品などの力により卵子の状態からすべて管理するわけだが、特に下位３つの階級はボカノフスキーというやり方で一つの受精卵からたくさんの人間を作り出し、身長も抑えられて、奴隷としか言いようのない状態

にしている。同時に社会の安定のため、お互いにお互いの階級をうらやまないように徹底的に睡眠学習をはじめとする様々なプロパガンダ、洗脳を繰り返す。結果として彼らは皆自分の階級に生まれてよかったと心の底から思うようになっているのだ。しかも何らかの心の不調、不満などを感じた時にはソーマというドラッグを使うことができる。A gramme in time saves nine. / One cubic centimeter cures ten gloomy sentiments. / A gramme is always better than a damn. (89) (注3) などと言われ積極的使用を勧められている。しかもこのドラッグ、副作用ゼロという優れものである。社会の中でそれぞれの役割・仕事も決まっているし、結婚制度もなく誰とでも楽しむこともでき、その上死ぬ直前まで若さを保つこともできる。いわゆる生老病死の中で死だけは乗り越えられていないが、しかし洗脳を通じて死の恐怖を取り除くことには成功しているようで、まさに死をも克服していると言っていいほどだ。このようなある意味完璧な世界でもなぜかうまく馴染めない人間、違和感を覚える人間が生じてしまう。ここではバーナード・マルクス、ヘルムホルツ・ワトソン、そしてジョンを取り上げたい。

バーナード・マルクス

バーナードは中々の困り者である。そもそもBNWではすべて人間は人工的に作られており、彼は一番上のアルファ・プラスに属してはいるが何らかのミス（周りからは受精卵の時に代替血液としてアルコールを入れられたからだと噂されていた（51））で背が低く下の階級の者と話すときも目線の高さが同じになってしまい屈辱を感じてしまう。

Bernard's physique was hardly better than that of the average Gamma. He stood eight centimetres short of the standard Alpha height and was slender in proportion. … Contact with members of the lower castes always reminded him painfully of this physical inadequacy. … Each time

he found himself looking on the level, instead of downward, into a Delta's face, he felt humiliated. (69)

そのためBNWでは完全なフリーセックスであり、望めば誰とでも寝ることができるにも関わらず、しかもレーニナというほんわかして柔らかい（wonderfully pneumatic (49)）女性とすぐにでも寝ることができるのに彼はとりあえず一度は躊躇する。彼はレーニナと個人と個人の関係を求めてしまい、ただの肉体的な喜びではなく精神的なつながりを求めてしまう。これがレーニナには理解不能であり、二人の関係は妙にぎくしゃくしてしまう。普通はこの段階で読者はバーナードが主人公かも？と思うのだが、結果としてそうはならない。彼はレーニナとインディアン居留地に行った際に、ほんの偶然から嫌な上司トマキン（彼はバーナードをアイスランドに島送りにしようとしていた）がその昔そこに置き去りにしてしまったリンダという女性、そしてその息子ジョン（父親はトマキン）を発見し自分たちの世界に連れ帰る。それによって彼は上司に復讐もでき、しかもジョンが人気者になったため、そのマネージャー的存在になりちやほやされるや否や、あっさりと現状に満足し、人生は素晴らしいという感情を抱くようになる。つまりそれ以前に抱えていた屈折のようなもの、社会に対する違和感のようなものは単なる僻みであり何ら重要性を持たない。身長が低いために劣等感を持っていたにすぎないのだ。彼の不満はモテるという代償行為で簡単に解消する程度のものであり、彼は自分の社会的成功、つまり重要人物扱いされることで、あっという間に世界と和解してしまう。

Success went fizzily to Bernard's head, and in the process completely reconciled him (as any good intoxicant should do) to a world which, up till then, he had found very unsatisfactory. In so far as it recognized him as important, the order of things was good. (145)

その後も自分自身に酔ってしまい、こともあろうに世界統制官であるモンドに報告書の中で意見までしてしまう。愚か者の極みである。しかもジョンが起こした騒ぎにヘルムホルツとともに巻き込まれてしまい結果として処分を受ける羽目になった時には、自分は島流しは嫌だ、などとかなり情けない姿を現す。

"Send me to an island?" He jumped up, ran across the room, and stood gesticulating in front of the Controller. "You can't send me. I haven't done anything. It was the others. I swear it was the others." He pointed accusingly to Helmholtz and the Savage. (203)

プライドのひとかけらもない。彼は単にジョンを連れてくるための役割を与えられているいわばコマのような人物であり、それ以上の役割は与えられていないのではないだろうか。

ヘルムホルツ・ワトソン

彼は一番上の階級アルファ・プラスに属しており感情工科大学の講師である。同時に感情技術者としてフィーリー（触覚映画）の脚本を書いたり、数々のスローガンを作ったり睡眠学習用の韻文を作ったりしている。まさにエリートである。彼はバーナードともそれなりに仲良くしているが、それはあくまでバーナードもこのBNWの世界に不満を持っていたからだ。

What the two men shared was the knowledge that they were individuals. But whereas the physically defective Bernard had suffered all his life from the consciousness of being separate, it was only quite recently that, grown aware of his mental excess, Helmholtz Watson

had also become aware of his difference from the people surrounded him. (71)

自らがあまりに有能すぎるため最近この世界に対する違和感に気づいたヘルムホルツは、そのためバーナードともなんとなく付き合ってはいたが、彼は最後まで全くぶれることなく自分が島流しにされようとも意に介さない。いわゆるボスキャラ的な存在、モンドとまともに語り合えるのも彼だけであり、その意味では彼こそが主人公になるべきだったのかもしれない。しかしながら彼にはパッションがない。命がけで何かを変えようという気概がないのだ。自分のやっていることに物足りなさを感じ、言葉で何かを変えたいという気持ちもありそうだし、言葉そのものを極めたい、言葉で何かを一瞬でひっくり返したいという気持ちもある。しかし、一方真理の追求、世界を読み解こうなどという気持ちの強さはまるでない。興味が社会に向いているようで実は向いていない。ただ好きなことを極めたいという気持ちはありそうだがそれはあくまで内向きでしかない。但し最終的に彼が主人公足りえないということには同情を禁じ得ないところもある。そもそも彼の不満はあまりに個人的なものであり、社会に対する不満とは種類が違う。その上、彼には戦うべき相手がいないのだ。ボスキャラっぽい世界統制官モンドは出てくるとはいえ、後述するように彼もまたあまりにゆるい。モンドは社会が安定すればそれだけでよいという人間であり、これでは戦いようがないというくらいゆるい。まさに暖簾に腕押しである。そもそも島流しはゆるすぎないだろうか？ヘルムホルツは優秀すぎるが故に社会に対して違和感を覚えており、しかも少なくともジョンたちと病院で騒ぎを起こしてしまったのは事実なのだ。それを考えると彼は明らかに社会にとって不安定要素だったのだから。

ジョン（John the Savage）(注4)

ジョンはインディアン居留地で育つ。しかし彼はトマキン（中央ロンドン

孵化・条件付けセンター長であり、バーナードの上司）とリンダの子であり、純粋に遺伝子的にはBNWの人間であるのは疑いない。他のBNWの人間との違いは、彼は人工的ではなく自然にリンダの妊娠、出産によって生まれたということ。必然的に親がいることになる。親がはっきりしているということであり、親というものが存在しないBNWの世界では全く異質な存在である。（BNWの世界では、母親という言葉はobsceneであり、父親という言葉はscatologicalであるとされる（140））またBNWの世界では睡眠学習を基本とする洗脳を徹底的に受けるが、ジョンはインディアンの世界で彼らの文化の中で育ったのだ。たまたま手に入れたシェイクスピア全集（リンダの男であるポペが偶然地下祈祷所で見つけたもの）を徹底的に読むことで過去の文化を知り、まだ見ぬBNWの世界にあこがれを抱きもする。彼にはとってインディアン居留地は決して心地よい場所ではなかった。母親であるリンダは何から何までBNWの人間であり、自分の子供といってもどう扱って良いかわかるはずもない。しかもインディアンの世界でもどう振舞うべきかわからないからそれまでと同じように振舞う。つまり誰とでも寝てしまうがゆえに常にトラブルを起こしてしまう。子供であるジョンも母親のそんな姿に耐えられるわけもなく、しかも元々よそ者であるがゆえに、居心地の悪さを感じ続ける。大切な儀式で周りの同年代のインディアンと同等には扱ってもらえないこともあり、彼の苛立ちは当然であろう。ごくまれに例えばリンダと寝る男を殺そうとして少し男として認められたり、村の長老から優しく扱われることもあるがあくまで「ごくまれに」である。従ってバーナードに発見されると喜び勇んでBNWへ向かうのだ。しかしながらそこでも彼はやはり異邦人であり、価値観が違いすぎるがゆえに全く馴染めず孤独感を深めていく。結果として彼は両方の世界から拒絶されてしまう。しかしながら少々変わっているとはいえ英語を話し、外見はBNWの人と同じ白人である。しかも珍しがられて人も寄ってくるし、BNWではもしかするとうまくいく可能性があったのかもしれないが彼はそれを自ら拒絶してしまう。

ジョンは自分にとって慰め、喜びになるかもしれなかったレーニナをも拒絶してしまう。彼はレーニナに惹かれているにもかかわらず、である。彼の何が問題なのか？もちろん彼の内面であり、彼自身である。そもそも彼が使う言葉が問題であり、BNWの世界にとって過去の遺物ともいえるシェイクスピアが問題なのである。彼はシェイクスピアを読み込み、その世界にあこがれを抱き、同時に彼はその世界の価値観を自分のものとすることで、いわば彼自身を作り上げてしまう。この時点で彼の悲劇が始まる。彼はいわば借り物の言葉、借り物の思想の中で生きることになってしまうのだ。彼は「ロミオとジュリエット」「テンペスト」などで愛を知り、「ハムレット」「オセロー」「リア王」などによって彼の倫理観は形成された。一つだけ例を見てみよう。彼は母親であるリンダと関係を持つポペを憎んでいたのだがそれはシェイクスピアを知ることではっきりする。

He hated Pope more and more. A man can smile and smile and be a villain. Remorseless, treacherous, lecherous, kindless villain. What did the words exactly mean? He only half knew. But their magic was strong and went on rumbling in his head, and somehow it was as though he had never really hated Pope before; never really hated him because he had never been able to say how much he hated him. But now he had these words, these words like drums and singing and magic. These words and the strange story out of which they were taken (he couldn't make head or tail of it, but it was wonderful, wonderful all the same) — they gave him a reason for hating Pope; and they made his hatred more real; they even made Pope himself more real. (123-4)

つまりシェイクスピアによってもやもやした感情・思考をはっきりさせることができるようになったということであり、言葉を得たということである。

しかし彼の場合シェイクスピアしか読むに値するものがなかったこともあって彼は作品を咀嚼するのではなく最終的にはその言葉の奴隷になってしまった。これこそが彼の悲劇なのである。(注5)

BNWという題名からも彼は「テンペスト」の中のミランダのようなものであるように言われることもある。しかしシェイクスピア作品の中で一番似ているのは誰かと言えばおそらくそれはハムレットだろう。ハムレットは母であるガートルード、恋人であるオフィーリア両方に対する不信感に苦しむ。一方ジョンは母親との関係、つまり母親が自分の望まない相手との関係を持っていること、愛するレーニナの不実、つまり彼から見ると誰とでも寝るレーニナは自分の愛を捧げる相手としてはふさわしくないのでは？と疑いを抱いてしまうところなど中々つらい立場に立たされている。要するに彼にとっての女性は母親といいレーニナといい、どちらも信用できず、女性不信とでもいうべき状況に追い込まれてしまう。彼は母親であるリンダからは愛されているとは言い難い状況だったため、尚更レーニナに愛情を求めたのだろうが、彼が求める愛情を彼女が与えてくれることはなかった。そもそも彼の要求が過大なのであって、レーニナからすると彼はただの変人である。魅力があるのは確かだが理解不能の変人なのである。彼が純粋さを求めれば求めるほど、レーニナにとって彼は遠くなってしまう。やっと結ばれるかという場面でも彼は彼女にとってわけのわからないことを言い、レーニナは次のように言うしかない。

"For Ford's sake, John, talk sense. I can't understand a word you say. First it's vacuum cleaners; then it's knots. You're driving me crazy." (174)

そのすぐ後でレーニナは自分がついに受け入れられたと勘違いしてしまい、ほぼ裸で彼に抱き着いてしまう。しかしレーニナは思い切り拒絶されてしま

うのだ。"Whore!" he shouted. "Whore! Impudent strumpet!" (177) その混乱たるや、ハムレットがガートルードの目の前でポローニアスを刺殺ししかも「ネズミか」かなどと暴言を吐きその上ガートルードには見えない父王と話し始めた時のようだったのかもしれない。(注6) あの時ガートルード側から見れば、目の前で息子は殺人を犯すわ、空中に向かって話し始めるわ、しかも自分をなじるわで、もう無茶苦茶である。レーニナの感じた恐怖も同じようなものだったのではないか。(注7)

その後、ジョンはリンダが死んだ際に精神的に参ってしまったらしく、いら立ちが募る。そして連絡を受けその病院にやって来たヘルムホルツやバーナードの目の前で下層階級に配られるはずのソーマをぶちまけてしまい騒動を起こす。デルタ階級の人々に向かって自由になりたくないのかと叫んでソーマを窓から投げ捨てるのだ。

"Don't you want to be free and men? Don't you even understand what manhood and freedom are?" … "I'll teach you; I'll make you be free whether you want to or not." And pushing open a window that looked on to the inner court of the Hospital, he began to throw the little pill-boxes of soma tablets in handfuls out into the area. (193)

結果としてジョンはヘルムホルツやバーナードと共に処分を受けることになる。他の２人はモンドによって島流しにされるが彼はインディアン居留地に帰ることは許されない。そこで彼は人が住んでいない荒れ地の中の航空灯台に住むことになる。どこまで行っても中途半端な状態に置かれてしまうのだ。生まれも育ちも中途半端、そして言葉も愛も借り物。レーニナと結ばれることもない。たとえ肉体的に結ばれたとしても精神的な結びつきがなければ彼にとって何の意味もない。彼にとって真実の愛？敢えて言えば自分にだけ向けられる愛でなければ所詮無意味であり、むしろ罪悪ですらある。それ

故彼は自分を鞭打って自分を痛めつけることでしか自分を保つことができない。彼は鞭打つことで魂の浄化を図ることによってしか自分の存在意義を感じることができないのだ。(注8) 彼は追放先で自分を痛めつけ魂を浄化して自分の信じる神との合一を図ろうとするが、しかしこれすらBNWでは物見遊山の対象になってしまう。彼の鞭打ちは隠し撮りによって皆に知られることになり、人々はそれを見に行って大笑いする。見物人たちとのやり取りは次のようなものである。

…"What do you want with me (John the Savage)?" he asked, turning from one grinning face to another. "What do you want with me?"

"The whip." Answered a hundred voices confusedly. "Do the whipping stunt. Let's see the whipping stunt."

Then, in unison, and on a slow, heavy rhythm, "We －want－ the whip," shouted a group at the end of the line. "We －want－ the whip." (228 カッコ内は筆者)

しかもそれがちょっとしたきっかけで狂乱の渦へと変貌を遂げる。自分の鞭打ちを皆が囃し立てている時にレーニナがやって来る。彼は思わず彼女を鞭で打ち始め、それが契機となって皆が合一の精神でスラップスティック的どたばたの狂乱の渦を巻き起こしてしまうのだ。その結果、ジョンは次の日首を吊ることになってしまい物語はそこで終わる。なんとも痛ましいがこれはFirchowが指摘している事が原因と思われる。(注9) ジョンは狂乱の中でレーニナを鞭で打ち、そのまま興奮の赴くままについ関係を持ってしまったのだろう。自分が否定し続けた最も唾棄すべきことをしてしまったわけだ。(注10) それで突然、性に目覚め「鞭打ちジョン」とでもなれば喜劇なのだが、彼はそうはならなかった。自分が快感を得たことに深く恥じ入り、つまり自分が自分はこうである、こうであるべきだ、と考えていたのにそれが実は全く違っ

ていたということに気づいてしまい、愕然となる。しかもそれは自分が信じる神に対する冒涜であると感じ、もはや生きていくことはできなかったのだろう。

知るということは変わることだ。ジョンはシェイクスピアを知ることで変わった。そのため生まれたところを離れる際、喜び勇んで「テンペスト」のミランダのように、素晴らしい新世界、に飛び出していく。しかしそこは彼自身でもあるシェイクスピアが否定されている世界でもある。ジョンの敗北はシェイクスピアを代表とする芸術の否定であり、芸術を作るのは人間であることを考えると人間の否定でもある。娯楽としてフィーリー（触覚映画）があるが、BNWの住民を楽しませるだけの物であり。人間の自由な精神の発露としての芸術とは似て非なるものである。こういった状況を考えると彼はこの作品の中で一番主人公になりえた人物だったといえよう。しかしこれまで見てきたように彼は言わばシェイクスピアの乗り物として使われていただけである。それ故鞭打ちをきっかけとした狂乱の中で自分の本質と向き合うことになってしまった時、それに耐えられなくて死を選ぶ。彼にとってはそれが唯一彼の誇りを保つ方法だったのだろう。結局のところ彼はBNWの世界と戦う主人公としてはあまりに弱すぎるのだ。彼には世界を変える力もなければ、自らが生きる世界の悩み、苦しみを体現する者にもなりえていない。繰り返しになるが、彼はすべてが借り物なのだ。また更に言うなら彼が生まれた居留地はそれはそれで完結している世界であり、BNWの世界に対抗して新たな物語を作りあげる力もない。主人公足りえないジョンは、BNWの世界を体現しているレーニナに飲み込まれ死んでいくしかなかったのだ。

２．馴染んでいる人々

馴染めない人がいる一方、勿論馴染んでいる人もいる。BNWにおいては馴染んでいる人が圧倒的大多数であり、作中特に強力なのがレーニナ・クラ

ウンであり、統制官のモンドである。レーニナはこの世界に全く違和感を持つこともなくその生活を楽しんでおり、モンドは過去の経緯、なぜBNWの世界が出来上がったかをすべて理解した上で最終的に「安定性」を選択した人物である。ではまずレーニナについて考えてみよう。

レーニナ・クラウン

彼女はBNWの中で一番気の毒と言っていい存在である。彼女はこの世界では普通の女性であり、外見的には申し分なく、実際彼女は同僚の男性から "Oh, she's a splendid girl. Wonderfully pneumatic. I'm surprised you haven't had her." (49) などと言われていることからも特に魅力的な女性として描かれている。また彼女はあまり物事を深く考えるタイプでもなく、I don't understand. とか You don't say so. などのフレーズをよく口にするし、何か嫌なことがあると教え込まれたフレーズをすぐに思い出して実際にソーマを服用する。ほんの少し変わったところがあり、例えば同じ人と普通より長く付き合ったり、何のとりえもなさそうなバーナードに惹かれてしまうなど彼女の同僚にあきれられてしまうこともある。しかしいわゆる良い人たちともごく自然に付き合っている。好みの男性と過ごすのは楽しいし、色々な男性と楽しみながら、もちろんそこに何らかの罪悪感があるわけではなく順風満帆、非常にうまくやっていた。彼女は皆と同じように everyone belongs to everyone else (46) を実践していたに過ぎないのだ。バーナード・マルクスと出会うまでは。

変人バーナードと出会うことによって何かが狂ってしまう。元々特定の個人に惹かれてしまう傾向を秘めていたのかもしれないが、バーナードのおかしさに気づいても—友人からマルクスの噂、つまり人間製造の工程で代替血液としてアルコールを入れられたという噂を聞いても—すっかりこの世界に順応しているが故に、そのおかしさのなかに危険性を感じることはない。そのためバーナードに付き合ってインディアン居留地に行き、結果としてジョ

ンに出会ってしまう。ジョンの異常さ、BNWの世界にやってきた後全く馴染まない、馴染もうとしない彼の態度が理解できず、結果として彼女にとってはごく普通に彼に迫ってしまい、彼を逆上させたりもする。しかしそれで何かを学習することもなく彼女は全く変わらない。ソーマを飲むことによって嫌なことはすぐ忘れ、あくまでマイペースである。そして最終的にはこの世界とインディアン居留地の間のまさにマージナルな世界で宙ぶらりんの状態に置かれているジョンのところに友人に誘われたとはいえ期せずしてのこのこ出かけてしまい、結果的にジョンに引導を渡してしまう。全く変わらない、安定性（stability）そのものであるレーニナこそはBNWの世界の象徴であり、最終的にはすでに述べたとおり、狂乱の渦の中でそのカウンターパート（対照）としてのジョンを丸ごと飲み込んでしまうのも当然であろう。おそらく彼女はジョンが死んだ後もそれまでと全く変わらず楽しい生活を続けることだろう。ジョンを思い出すとしても「変な人だったわ」程度であろう。また彼女を表現する言葉pneumaticこそがこの世界をよく表している。その柔らかさ心地良さこそがBNWの世界そのものであり、それを楽しめないものは排除されるしかないのだ。その世界に浸かりきって楽しめるもの以外は存在理由はない。柔らかく、温かく、しかも絶対的な安定性を持った世界それこそがBNWの世界であり、レーニナそのものなのだ。(注11)

ムスタファ・モンド

BNWの世界において反抗する者たち、この場合ジョン、ヘルムホルツ、バーナードを体制側から論破し叩きのめすのはモンドである。レーニナが肉体的・精神的にBNWを具現化しているとすればモンドはBNWの理論を具現化している。彼は特にジョンに対してこの世界の成り立ちを説き、同時に自分の立ち位置を明確に示す。彼はヘルムホルツに対して追放という処分を下し多少の厳しさを見せるが、同時にその面白さとでもいうものを伝える。モンドは島流しを伝えた時にバーナードが取り乱すのを見て次のように言う。

"One would think he was going to have his throat cut," said the Controller, as the door closed. "Whereas, if he had the smallest sense, he'd understand that his punishment is really a reward. He's being sent to an island. That's to say, he's being sent to a place where he'll meet the most interesting set of men and women to be found anywhere in the world. All the people who, for one reason or another, have got too self-consciously individual to fit into community-life. All the people who aren't satisfied with orthodoxy, who've got independent ideas of their own. Every one, in a word, who's anyone. I almost envy you, Mr. Watson." (204)

本来、彼の役目は「カラマーゾフの兄弟」の大審問官、「1984」のオブライエンのように体制側の論理をきっちり説明し、反抗するものを完膚なきまでに論破し、心の中まで完全に服従させようとするものである。そもそもそうしなければ彼ら自身、支配者側の正当性、アイデンティティを失ってしまうからだ。それに比べるとモンドはあまりに甘い。ゆるすぎである。むしろ本当に優しそうにさえ見えてしまう。彼は「羨ましい」と言うがもしかすると本音ではないのか？と思わせるほどである。もちろん彼はある時点で自ら選択を行っているのであり、羨ましい云々は彼らに対するやさしさであろう。もしくは彼らが島流し先でうまくやっていけるように、憂いがないように彼らが行くのはいい所だと思わせようとしているのかもしれない。しかし、それでもやはり「ゆるい」としか言いようがない。他の作品に比べ、特に「1984」などと比べるとSF的要素が強いとはいえあまりにゆるい。例えば「1984」などでは運動としての正しさの追求、つまり常に敵を破滅させることにより自己の正しさをより強固なものにしていくという正しさのダイナミズムとでもいうべきものがあるのだが、BNWではそれが決定的に欠けている。しかしながら同時にBNWの世界は実は「1984」や「われら」などよ

りもかなり落ち着きの悪さを感じる。悪夢的なイメージはむしろそれらのディストピア小説の世界より強くなっている。何故なのか？それは安全弁としてソーマという完璧なドラッグがあるからだ。(注12)

３．ソーマ

物語はなぜ読まれるのか？それは物語を通じて自らがその中に入り込み疑似体験ができるからだ。つまり登場人物、しばしば主人公に自らを同一化させ、バーチャルリアリティーとして追体験し物語世界を味わうことができるからである。その際、主人公の人生が波乱万丈であればそれだけ自分の感情も揺さぶられることになるだろう。例えば「1984」では主人公のスミスは信じてはいけない人物を信じ、当然の如く裏切られ、その上最終的には絶対に守らなくてはならない恋人をも裏切ってしまう。自分の愚かさ、弱さ、醜さを知るわけだが、同時にオブライエンつまり体制側からある意味自分が愛されていたことを知る。それによって彼は従容として自らの死を受け入れる。そこに戦いがあり、敗北があり、葛藤がある。つまり大きな感情の揺れがある。だからこそ面白いのだ。一方、BNWはどうか？登場人物すべてが完全にその世界に満足しているということはないようだ。社会であり他人がいる限り、どんなに理想社会を作ろうとしても限界はある。そこに不満が生じるのは避けがたい。あらゆる人間が満足し、不満を全く感じないような世界はあり得ない。それ故普通のユートピア・ディストピア物ではそこで目覚めた人がその社会と戦い始める。しかしBNWにはソーマがある。ハクスリーのドラッグ好きは彼の他の著作を見てもわかるが、(注13) 彼はある意味完璧なドラッグをこの作品の中で創造している。これさえあれば何か思い通りに行かなかったり、不快な思いをしてもこのソーマを飲めばすべて解決する。そもそもこの世界の人間たちは工場で生産され、しかも成長の過程で様々な必要なことを叩き込まれ、それは大人になってからも永遠に続く。その結果彼らはBNWの世界が望む人間になり、社会の完璧な歯車になることができる。

上位階級のアルファやベータでさえ社会が望むような行動を強いられ、自分で考えることのできないそれ以下の階級は問答無用で奴隷である。そもそも人間は自らを自己家畜化することによって社会を成立させていることを考えると皮肉的ではあるが、ある意味人間社会を究極の形にまで進化させているのだ。しかしながらそれでもやはり不安定要素（不快なことなど）が生じるため、それを和らげ、忘れさせるためにソーマがある。ソーマはこの社会の安全弁であり、社会の安定性の強化のために必要不可欠なものである。だからこそレーニナは少しでも不安を感じるとソーマを使うし、一方ジョンはソーマを否定しそれによって騒乱を巻き起こす。つまりBNWの世界は肉体的・精神的にはレーニナ、理論的にはモンドがその象徴となっており、そして社会全体の安定はソーマが担保しているのだ。この世界ではある意味ソーマが宗教のような存在になっている。まさにAll the advantages of Christianity and alcohol; none of their defects. (60) である。この世界に不満を持つ人間は例えいたとしても肉体的・精神的にはレーニナに包まれ、理論的にはモンドに包まれ、社会全体の不満などいわゆる社会のほころびはすべてソーマに包まれ、いつの間にか治癒されているのである。

４．悪夢の本質

ユートピア物の特徴の一つは「自由」の扱いである。中にいるものは自由を著しく制限され、それを打破しようとして失敗する。その過程で自由を制限する側、つまり統治者側の姿を明らかにしていくというパターンが多い。BNWもある程度その形に近いのだが、「悪夢度」とでもいうべき尺度があるなら、まさにナンバーワンかもしれない。何故か？それについて考えてみたい。

これまで個々の主人公を見てきたがそれぞれ葛藤に近いようなものがあるとはいえ、彼らはジョンを除けばすべてBNWの製品なのである。彼らは皆、工場で製造されており、初めから家族というものがない。家族がないから特

定の個人に向けられる愛などというものもない。男女はそれぞれが単なる欲望の対象であり愛の対象ではない。つまりBNWの世界は愛のない世界なのであり、その結果、誰かのために命がけなどということもない。また、他のユートピア物では統治者側がある意味必死になって人間を作り替えようとするが、それは理想社会を作ろうとする場合、問題となるのは実は個人だからだ。個人が一人一人別人であるがゆえにそれぞれの理想とするものが違う。そもそも好き嫌いも違う。ユートピアというものが決して存在しえないゆえんである。しかしながらこれは序でも述べたように逆説的には人間が変わればユートピアは可能であるということを示唆している。

それ故BNWでは、人間を変えるために人間は人工的に作られ、しかも全ての人間は年は取るが老いることはないという状態にする。若者のまま年だけをとり、やがて突然死ぬ。不死は達成していないが不老は達成しているのだ。既述の通り生老病死が生きる上での悩みになるなら死以外の悩みは存在せず、しかも徹底した洗脳により死そのものも受け入れる覚悟？がすでに出来ている状況であり、つまり死というものもすでに存在しない。それでも何か悩み、不満、不安が生じたときにはあのソーマがある。副作用なしの麻薬。こうして見るとBNWではあらゆる問題が解決されている。しかしこのような世界でさえすでに述べた通り違和感を覚え、しかもソーマを否定？する者もいる。しかしバーナードは単なる愚か者でありヘルムホルツは妙に超然としていて単なる皮肉屋の枠を出ない。一方ジョンは戦おうとするが実のところ自らがよって立つ基盤がない。インディアン居留地に対する想いは強いが受け入れられているわけではなく、しかも彼の思想、言葉すべてが借り物。それでも戦おうとするが相手が悪すぎる。レーニナは全く理解してくれず、モンドには軽くいなされ飼い殺しにされるだけ。結局のところBNWの世界の中では戦いが一切ない。やむにやまれぬ感情の高まりなどというものは一切存在しない。(注14) あたかもローマ帝国時代のパンとサーカスがあるだけ。これでは戦いようがない。せめて少しは抑圧してくれなければ、恐怖を与え

てくれなければ、反抗のし甲斐がない。つまりこれこそが悪夢の本質なのであり、他のユートピア・ディストピア物との決定的な違いはここにある。そもそもこの作品の一つのクライマックスになるはずだったモンドとジョン、ヘルムホルツたちとの対決？も余りにもゆるい雰囲気で進んでいく。最終的に島流しにするがヘルムホルツなどは自分で行先の希望を出すこともできたのだ。結局この世界は反抗もしづらいし、例え反抗したとしてもせいぜい追放、しかもその追放先は似た者が揃っていてそれなりに楽しいかもと思わせるところ。真綿で首を締めるという表現はあるが、真綿で社会全体を包んでいるようなものであり、何をやろうが何も変わらない世界なのだ。まさにレーニナの台詞 "Was and will makes me ill. (101)" であり、永遠の現在つまり歴史が終わった世界なのである。その上支配者側にもやる気が感じられない、ゆるい世界である。永遠の安定性、これこそが悲劇の本質、悪夢の本質なのかもしれない。そこに人間は存在しないから。

まとめ

人間とは何か？人間はなぜ生きるのか？ユートピア物語というのはそれを考えるきっかけにもなる。今回BNWについて考えてきたが、この作品の気持ち悪さ、悪夢性とは何だったのだろう？BNWでは種としての人間は生き残っていくだろうが家族の消滅により、個人が楽しむこと以外、目的がすべて消え去ってしまっているのであり、しかもソーマの存在により葛藤も苦しみも戦いもすべてが消えている。例え突然変異のように何かを変えたいと思う人間が現れても、それはあたかもバグのように処理されるだけ。ヘルムホルツやジョンの処理を見ればよく分かる。この作品には時代性もあってコンピュータが出てこないが、おそらくハクスリーが今、この作品を書いたとしたら間違いなくコンピュータが支配する世界を構築しただろう。すべてAIが制御する世界。誕生から死に至るまで。一体そんな世界に生きる価値はあるのだろうか？おそらくそう考える人間すら消滅しているだろう。悪夢と感

じる人間すら存在しない悪夢的な世界。結局のところBNWが提示する世界は無の世界かもしれない。そしてこれこそがこの作品の持つ妙な落ち着きの悪さ、悪夢性とでもいうものなのだ。そう考えるとBNWは時代を少し先取りしていたが確かに本当のユートピアなのかもしれない。そして逆説的にはなるがユートピア・ディストピア物語が書かれている間は人間は大丈夫なのかもしれない。

ーテキストー

Huxley, Aldous. *Brave New World*. 1932. Harper & Brothers. *Brave New World Revisited*. 1958. Harper & Row. *Brave New World and Brave New World Revisited*. Harper Perennial Modern Classics edition. 2005.

ー注ー

（注１）Orwell, George. *Collected Essays, Journalism and Letters.* Vol 2 *My Country Right or Left* : 1940-1943. Eds. Sonia Orwell and Ian Angus. London: Secker & Warburg 1968. Reprinted 1969. p.17.

（注２）Orwell, George. *Collected Essays, Journalism and Letters.* Vol 4 *In Front of Your Nose* : 1945-1950. Eds. Sonia Orwell and Ian Angus. London: Secker & Warburg 1968. Reprinted 1969. p.73.

（注３）これはレーニナの台詞であるが睡眠学習などによって、BNWの世界の人間にしみこんでいる言葉であり、ほぼ条件反射的に出てくる言葉である。

（注４）ロレンスの影響などもありジョンを登場させたのだろうが、欧米はとかく未開人に幻想を抱きすぎる。欧米のいわゆる知識人が未開の土地の人々に妙な幻想を抱くのはキリスト教の普及によって土地伝来の宗教的なものを排除していったことに原因があると思われる。それゆえキリスト教から生じた共産主義的理想主義をそのモデルの一つとしているBNWの世界に、その世界を受け入れないジョンを登場させたのは不思議ではない。しかしそうなるとジョンはいわば初めから現実に存在する人間というよりはむしろ欧米の人々の幻想の産物ということになり、あまりに人工的になってしまう。他の人物とは違い、本来自然なはずなのに、逆に設定をインディアン居留地に

してしまったがゆえに作り物になってしまったのだ。BNWの世界の中のどこか別のところなら話は全く違ったものになっただろう。しかしそれさえ許されそうもないところがより一層、悪夢性を強めることになっていると言えよう。

（注５）BNWの人たちも何かあると睡眠学習などで叩き込まれた様々な「フレーズ」が自動的に頭に浮かぶ。ジョンはシェイクスピアの「台詞」が浮かぶ。どちらも似たようなものかもしれない。

（注６）「ハムレット」３幕４場

（注７）この類似性を見てもジョンがレーニナに女性、母親両方を求めていたことがよくわかる。

（注８）ジョンはBNWの子供たちがインディアンの鞭打ちのフィルムを見て大笑いするのが理解できない。またからし湯を飲んで吐くことにより自分を浄化しようとする。モンドとの会話の後の場面では "I ate civilization…It poised me; I was defiled… Now I am purified, I drank some mustered and warm water." (316) といった具合である。

（注９）FirchowはThe End of Utopia: A Study of Aldous Huxley's *Brave New World* の中で次のように言っている。Again the Savage attacks her, this time with his whips, maddened by desire, by remorse, and be the horde of obscenely curious sightseers. In the end, however, desire triumphs and the Savage and Lenina consummate their love in an orgy-porgian climax. When the Savage awakens to the memory of what has happened, he knows he cannot live with such defilement. (Bloom's Modern Critical Interpretations Aldous Huxley's *Brave New World*. 2003. Chelsea House Publishers. pp.113-4)

（注10）伏線は十分にある。例えば彼がいかにレーニナに惹かれているかは次の場面を見てもわかる。自分を鞭打ちながらレーニナを打っている感覚になってくるのだ。"Strumpet! Strumpet!" he shouted at every blow as though it were Lenina (and how frantically, without knowing it, he wished it were), white, warm, scented, infamous Lenina that he was flogging thus. "Strumpet!" And then, in a voice of despair, "Oh, Linda, forgive me. Forgive me. God. I'm bad. I'm wicked. I'm … No, no, you strumpet, you strumpet!" (225) といった具合である。

（注11）特定の人間に自分の気持ちを向けてしまうというレーニナの傾向に注目して彼女こそがこのBNWの世界への本当の脅威なのだ、という主張もある。実際未完のハクスリー脚本のミュージカル（BNWを基にした）の中ではレーニナは性的魅力の強い女性というよりむしろ知的な女性として描かれ、ジョンと一緒にシェイクスピア全集を読み最終的には二人でタヒチへ逃れる、というものになるはずだったということもLaura Frostによって説明されている。これらの事柄はThomas HoranのReading *Brave New World* through the Lens of Feminismの中で指摘されている。CRITICAL INSIGHTS *Brave New World*. Ed. M. Keith Booker. Gray Hose Publishing / Salem

Press. 2014. pp.56-71 参照。しかしながらBNWの中でのレーニナはあくまでBNWの世界を象徴する人物として描かれており、可能性や、他の作品を見て、そこから論ずるのは少々無理がある。

（注12）ソーマに関しては作品中しばしば soma-holiday / A gramme is better than a damn. / A gramme in time saves nine. / One cubic centimeter cures ten gloomy sentiments. などと表現されている。

（注13）代表的なものに *The Doors of Perception*. 1954.などがある。邦題「知覚の扉」1995年　河村錠一郎　訳　平凡社

（注14）たまに、興奮することも必要なのでV.P.Sというものも用意されている。モンドによるとそれは次のようなものである。

"Violent Passion Surrogate. Regularly once a month. We flood the whole system with adrenin.（ママ）It's the complete physiological equivalent of fear and rage. All the tonic effects of murdering Desdemona and being murdered by Othello, wi thout any of the inconveniences." (215)